

聾学校乳幼児相談室における日本手話話者による親子支援

田中 瑞穂*・鹿内 信善**

A Report of Supporting project for a deaf Child and her Mother in Parent and Infant Program at a School for the deaf by Japanese Sign Language Signers

Mizuho TANAKA and Nobuyoshi SHIKANAI

概要

聴覚特別支援学校（以下、聾学校）において、親子を支援する取り組みを行った。この実践は、日本手話話者であるろう者講師ときこえる教師が、子どもの保護者と協同して取り組んだ。きこえる母親と聴覚障がいをもつ子どものコミュニケーションをより豊かにすることを目的とした実践を報告する。なお、本稿でのろう児・ろう者は、日本手話をつかうきこえない人を、聴者・聴保護者・聴教師は、聴覚障がいがない人を指す。

キーワード： 親子支援 日本手話 ろう者 聴保護者 協同教育

I. 問題と目的

聾学校乳幼児相談室は、聴覚障がいをもつ0～2歳児とその保護者に対する相談・支援を行っている。聴覚障がいのある乳幼児にとって最大の問題は、そのままでは音声言語（spoken language）獲得が困難なことである。補聴器装用や人工内耳手術などできこえの補償をすることが一般的である。が、これらの聴覚補償の効果には個人差があり、必ずしも音声言語獲得を約束するものではない。一方、日本語や英語などと同様、人類が生み出した自然言語のひとつ（市田, 2008）で、視覚言語（visual language）である日本手話をできるだけ早くから導入すれば、子どもの言語発達を保証できる可能性がある。

しかし、聴覚障がい児の90%が、きこえる両親の元に生まれ（廣田, 2013）、そのきこえる両親のほとんどが日本手話を知らない。海外では、ろう児が早期から自然手話に触れることが言語習得、認知力発達の面において極めて重要であることが認識されている（Yoshinaga - Itano, 2014）。しかし、我が国では、私立明晴学園などでの実践があるのみで、我が子に自然手話を習得させたいと望む聴保護者への早期支援システムは未整備なのが現実である。一方、公立校である北海道札幌聾学校においても、2007年度より、本人・保護者の教育的ニーズに基づき、教育活動に日本手話を用いる学習グループを編成している。そこで、第1筆者らは、2012年度より、札幌聾学校乳幼児相談室において、聴保護者がろう者と出会う

場を設定してきた。地域のNPO法人の協力により、ろう者講師派遣が実現した。乳幼児に対しては日本手話での関わりや絵本読み活動を、聴保護者に対しては日本手話講座を開催してきた（田中・鹿内, 2014）。

本論文は、日本手話を全く知らなかった聴保護者が、ろう者講師のサポートにより、我が子と日本手話でコミュニケーションできると実感できた取り組みについて報告する。本稿は、きこえる母親と聴覚障がいをもつ子どものコミュニケーションをより豊かにすることを目的とした報告である。

II. 研究内容と方法

(1) 倫理的配慮

本研究は福岡女学院大学研究倫理規定の制定前に行ったものである。ただし、同内容の研究倫理審査は、本論文第2筆者の前任教で受けている。これに則って、本研究では次のような研究倫理上の配慮を行った。

実践の様子を撮影することについては、文書によって保護者の承諾を得ている。本研究は日本手話に関する研究である。日本手話では表情も重要な言語要素になっている。このため、モザイク処理をしていない写真を本論文に掲載してある。このことについても、保護者から文書による承諾を得ている。さらに、本論文に掲載したすべての写真を保護者に確認してもらい「掲載可」である旨の承諾を得ている。

* 北海道札幌聾学校

** 福岡女学院大学

(2) 本研究対象児 A 児のプロフィール

感音性難聴90dB（注：耳介に接しなければ大声語を理解し得ないもの）。家族は全員聴者。来校以前、親子とも日本手話に接触した経験は皆無。生後5ヵ月で初回相談。同時期、母親は北海道札幌聾学校乳幼児相談室での日本手話講座に参加し始めた。本稿の研究時、女兒は1歳11ヵ月である。

(3) 研究内容

日本手話による絵本読みの活動で、親子と講師のやりとりがみられた場面を整理・分析する。それによって、親子のコミュニケーションについて考察する。

(4) 研究方法

- ① 活動をビデオに記録する。トランスクリプト、即ち、ろう者講師、子ども、母親の言動を全て文章として記録化する。
- ② ①のトランスクリプトに基づき、親子と講師のやりとりについて整理する。
- ③ 整理した内容から特徴的な場面を抽出し写真とも照合しながら検討・考察する。

ひこ童心社。0歳7ヵ月から2歳9ヵ月までの間、A児に対して毎月1ないし2回の個別指導を行った。その際、ろう者講師による絵本読みを合計34回行った。1回の活動につき、A児の集中力に合わせて1～3冊の絵本を読んだ。毎回、母親と一緒に参加した。あわせて、保護者対象の日本手話講座も、毎月1ないし2回、各1時間半程度行った。

本稿では、親子のやりとりの詳細をみる観点から、2015年6月5日、1歳11ヵ月時の活動を分析する。まず、活動記録映像を、トランスクリプト（ろう者講師、子ども、母親の言動を全て文章として記録）化する。次に、そのトランスクリプトに基づき、親子とろう者講師のやりとりについて整理する分析方法をとった。トランスクリプトの表記は、次の書式によった。

①日本手話の発語 / /, その日本語訳文 ()。

②音声日本語の発語「 」。

③日本手話の表記方法については白澤他（2002）を参照した。^{Whq}は肯否疑問文、^{Whq}は疑問詞疑問文を表示する表情が手話に付加されていることを示す。nodは頷きを示す。PTは指さし（後に続く数字は指さしが示している人称を表し、PT 1は一人称、PT 2は二人称、PT 3は三人称）を示す。後で写真とも照合しながら詳細な解説を加える個所は太字で表記しておく。

Ⅲ. 取り組みの内容

Ⅲ-1 ろう者講師との活動記録

読んだ絵本は、『どんどこももんちゃん』とよたかず

表1 1歳11ヵ月時の活動

時間 (分:秒)	ろう者講師の言動	A児の言動	母親の言動
00:01	・A児と対面し、絵本を保持して/進む 進む/と繰り返す。	・ろう者講師を見る。	・A児を見る。
00:10	・A児に/PT2 進む/と言う。	・ろう者講師を見る。	・A児を見て頷き/進む 進む/と言う。
00:11		・/進む 進む/と言い、母を見る。写真1	
00:14	・A児を見る。	・絵本を見る。	・A児を見て頷く。 ・絵本を見る。
00:15		・母を見て/登る 登る/と言う。	
00:16	・A児を見て/登る 登る/と繰り返す言う。		
00:21	・A児を見て/怖い/と言う。	・絵本を見る。	
00:23	・/ゆっくり 登る/と言う。		
00:28	・ページをめくる。	・ろう者講師を見て/登る 登る/と言う。	
00:30	・A児を見て/登る 登る/と言う。	・ろう者講師を見る。写真2	
00:33		・絵本を見る。	
00:35	・A児を見て/登る 登る/と言う。		
00:38	・ページをめくる。	・ろう者講師を見る。	
00:39	・A児に絵本を見せる。		
00:40		・母を見て/熊/と言う。写真3	・A児を見て/熊/と言う。
00:44	・A児に絵本を見せる。	・絵本を見て/熊/と言う。	
00:48	・/怖い/と言って頷く。	・ろう者講師を見る。	・ろう者講師を見る。
00:56	・ページをひらひらさせる。	・絵本を見る。	・絵本を見る。
01:01	・ページをめくって元に戻す。	・絵本を見る。	・絵本を見る。
01:05	・/何 ^{Whq} /と問う。	・ろう者講師を見る。	・ろう者講師を見る。
01:06	・/相撲 取る/と言う。	・ろう者講師を見る。	・A児を見る。
01:09	・A児と母を見る。	・母を見て/相撲/と言う。	・A児を見て/相撲 取る/と言う。

01:11		・母と右手を合わせて笑う。写真4	・A児の右手と右手を合わせて「どーん」と言う。
01:13	・A児を見る。	・ろう者講師を見て笑う。	・A児を見る。
01:15	・ページをめくる。	・ろう者講師を見て/ひっくり返る/と言い、「うえー」と発声する。	・A児を見る。
01:16	・/後ろ ひっくり返る/と言う。		
01:18	・A児を見て/やった/と言う。	・ろう者講師を見る。	・ろう者講師を見る。
01:19		・ろう者講師を見て/やった/と言う。	
01:20	・A児を見て頷く。		
01:21	・ページをめくる。		
01:22		・ろう者講師を見て笑い/しまった/と言う。	・A児を見る。
01:24	・A児を見て/しまった/と言う。		
01:28	・/走る 走る/と言う。	・ろう者講師を見る。	・A児を見る。
01:29	・/走る 走る/と言う。	・絵本を見て/走る 走る/と言う。	
01:32		・母を見て/走る 走る/と言う。	
01:33	・ページをめくる。		・A児を見て/走る 走る/と言う。
01:34		・母を見て/転ぶ/と言う。	・A児を見て/転ぶ/と言う。
01:36	・/走ってたら 転んだ/と言う。	・ろう者講師を見る。	・A児を見る。
01:38	・/次 何 ^{WHQ} /「次はどうなるかな?」と問い、ページをめくる。		
01:40		・母を見て自分の頭を右手で叩く。	・A児を見て頷く。
01:41	・A児を見る。		・「ごちーん」/痛い/と言って自分の頭を右手で叩く。
01:44	・A児を見て/痛い/と言う。	・ろう者講師を見る。	・ろう者講師を見る。
01:47	・/頭 打つ 痛い/と言う。	・ろう者講師を見て頭に右手を当てる。	・絵本を見る。
01:50	・/涙/と言って絵本を撫で、A児に絵本を差し出す。	・ろう者講師を見る。	・絵本を見る。
01:55	・A児を見る。	・絵本を撫で、ろう者講師を見る。	・絵本を見る。
01:57	・A児に/痛い/と言う。	・絵本を見る。	
01:59		・母を見る。	・A児を見て頷き/泣く/と言う。
02:02	・/次 何 ^{WHQ} /「次はどうなるかな?」と問い、ページをめくる。	・ろう者講師を見て/泣く/と言う。	
02:07		・母を見る。	・A児を見て頷き/泣く/と言う。
02:08	・/泣く nod進む/「泣きながら進む」と言う。	・ろう者講師を見る。	
02:09	・/泣く nod進む/「泣きながら進む」と言う。	・ろう者講師を見て/進む 進む/と言う。	・絵本を見る。
02:11		・ろう者講師を見て/進む 進む/と言う。	
02:13	・ページをめくる。	・母を見て両手を前に出す。	・A児を見て両手を前に出す。
02:15	・両手を前に出し、/何 ^{WHQ} /と問う。	・ろう者講師を見る。	
02:17	・両手を前に出し、/何 ^{WHQ} /と問う。		
02:19	・/何 ^{WHQ} /と問い、ページをめくる。	・絵本を見る。	
02:20		・ろう者講師を見て/ぎゅっ/と言う。	・A児を見る。
02:21	・/ママ ぎゅっ/と言う。	・ろう者講師を見る。	
02:22	・A児に/ママ ぎゅっPT2/「ママにぎゅっしてごらん」と言う。	・ろう者講師を見る。	
02:25	・A児の左足先に左手で触れ、/ママ ぎゅっPT2/「ママにぎゅっしてごらん」と言う。		
02:28		・母の所へ這っていく。	
02:30	・A児と母を見る。	・母に抱きつく。写真5	・A児を抱きとめる。
02:31		・母に抱かれる。	・「ぎゅっ」と言い、A児を抱きしめる。
02:35		・母から離れてろう者講師を見る。	
02:37	・絵本を閉じ、/おしまい/と言う。	・ろう者講師を見る。	・A児を見る。

Ⅲ-2 活動の分析



写真1

00:11 A児は、活動開始後、すぐに母を見て／進む進む／と発語した。読み手のろう者講師と自分だけでなく、母親も絵本読みに参画していることを視線共有で示している。なお、写真の、左がろう者講師、中央が母親、右がA児である。



写真2

00:30 A児は、ろう者講師と絵本を媒介にして、コミュニケーションを図っている。ろう者の日本手話の読みをしっかりと見ている。日本手話などの視覚言語を用いる場合、視線共有がコミュニケーション成立の要件となる。



写真3

00:40 A児は、ろう者講師の手話を模倣するだけでなく、母を見て、自発的に／熊／と発語した。



写真4

01:11 ストーリーに合わせて、母親からA児にはたらきかけた場面。ろう者講師が母親と両手を合わせた行動に続いて、母親も「ピーン」と言いながら、A児の右手と自分の右手を合わせた。



写真5

02:30 ろう者講師に促されて、A児が母親に抱きつきに行った場面。母親もA児とろう者講師の会話を理解して、迎え入れている。ろう者講師と聴者である母親の協同的なはたらきかけにより、親子が発展的に関わる事ができた。

今回の活動で抽出された特徴は、次の5点である。

1. A児と母親は、1冊の絵本を読む短い時間（2分37秒間）に、13回視線を共有した。
2. A児とろう者講師は、絵本を媒介とする活動を成立させていた。
3. A児から自発的な日本手話での発言がみられた。
4. 母親からA児への積極的な関わりがみられた。
5. A児は、ろう者講師の日本手話での指示を理解し、母親にはたらきかける行動がみられた。

Ⅳ. 考察

視覚言語である日本手話の会話場面では、視線が共有されることが基本となる。ろう講師とA児は、活動開始時から視線を共有し、絵本読みを成立させていた。聴覚からの言語入力制限されるろう児にとって、視覚を活用することは言語発達面で極めて重要である。ろう者講

師の視線活用ストラテジーをA児が自然に習得できることは、A児の言語発達において非常に重要な意味をもつと考えられる。実際に活動中、ろう者講師の模倣だけではなく、A児からの自発語がみられた。さらに、聴保護者がろう児である我が子と「視線を共有」する経験を持ち、日本手話を用いて信頼関係を築くことの意義は大きいと考える(井坂他, 2006)。そして、母親がろう者講師の促しにより、A児に自らはたらきかけたり、A児からの関わりを受けとめたりしていた。ここに、A児に対するろう者講師と母親の協同的な関わりをみることで

きる。我が子を得て、初めて日本手話に触れた聴保護者が音声に依らず、ろう者講師をモデリングしながら、視覚を活用したコミュニケーション方略を身につけている。活動時、ろう者講師に全面的に頼るのではなく、協同的な役割を果たしながら、我が子の言語発達を促進する過程で母親自身がエンパワメントされていく。その根拠として、母親が子育て応援雑誌に自ら投稿したエッセイ(2016年4月発行-協力者の匿名性を保証するためこのエッセイの掲載誌名は割愛する)の一部を紹介する。

小さな手の言葉

2歳になる長女は先天性感音性難聴、いわゆるろう児です。生後まもなく難聴を疑われ、3ヵ月のときに判明しました。医師からは「難聴の程度は重く、口話ができるようになるかわかならない。手話が必要かもしれない」と告げられ、今後の子育てに不安を感じたことを覚えています。Aがどのように成長していくのかまったく予想ができず、また、見た目にはわからないことから、親族以外の友人や隣人にAの難聴のことを打ち明けられずにいました。

5ヵ月になる頃、Aはろう学校へ通い始めました。私も一緒に乳幼児相談室というクラスに週1回参加し、ろう学校の先生にさまざまなことを教わりました。先生は私の不安を聞いてくれ、「ろうのお子さんは目で見る力があって、優れた洞察力をもっています」「簡単な身振りを使って『おはよう』『おむつ替えるよ』という声かけをすると、目で見る力が育って手話ができるようになります」とアドバイスをくださいました。

ろう学校の講師である大人のろう者の方に、手話で絵本を読んでもらうこともありました。食べ物の絵本を読んでいるときに、「“おいしい”という手話は手を頬に当てますが、小さい子には難しい動作なので、代わりに頭をぼんぼんと叩くんですよ」と先生から教わりました。そんな矢先、自宅で食事をしているときに、Aが“おいしい”と小さな手で頭をぼんぼんと叩きました。1歳を過ぎた頃でした。その瞬間、いままで感じていた不安がぱっと晴れたような気分になりました。

“おいしい”という言葉を話し始めてから、Aは次々と手話を覚えました。いぬ、ねこ、いただきます、あまい…など、小さな手と豊かな表情で表現するようになりました。もっと言葉を覚えてほしい、いろいろなことを話したいと思い、親子向けの手話辞典を片手に、身近なものや絵本に出てくるものの名前を何度も繰り返し伝えました。〈中略〉

Aは2歳3ヵ月になりました。最近、Aがろう児であること、手話で話ができることを周囲の人に打ち明けられるようになりました。友人、近所の人、子育てサロンのお母さん…みなさんがAの生い立ちについて話を聞いてくれ、「こんにちは」ってどうやるの?と手話に興味をもってくれます。

Aとのコミュニケーションや今後の子育てについて、不安がなくなったわけではありません。それでも、Aの小さな手と豊かな表情で話す姿からは、これからも笑顔と自信をもらえそうな気がします。

きこえない我が子と日本手話を通じてコミュニケーションを図るろう者講師が果たす役割の大きさや、我が子を受け容れ、きこえる母親自身が力を得ていく過程が率直に綴られている。

今回の実践を含む一連の実践により、絵本読みなどの活動場面で、ろう者講師と母親が協同的に子どもと関わっていくことが極めて有意義であることが示唆された。今後も、A児と母親への支援を継続しつつ、他の親子に対しても日本手話話者に接する機会を保障し、親子のコミュニケーションがより充実するよう取り組みを進めていきたい。

文 献

廣田栄子 2013 「乳幼児難聴の聴覚医学的問題 早期診断と早期療育における問題点」『Audiology Japan』Vol.56, No.3 206

北海道教育委員会 2007 『特別支援教育に関する基本方針(改定案)』

市田泰弘 2008 「日本手話と日本語対応手話」全国ろう児をもつ親の会編『バイリンガルでろう児は育つ日本手話+書記日本語で教育を!』生活書院, 2-3

井坂行男・井賀誠子・増田朋美・仲野明紗子・松梨恵唯・原田利子・内藤志津香 2006 「聴覚障害を有する幼児の言語獲得支援について(第1報) -教育相談における支援事例を通して-」大阪教育大学紀要第IV部門第55巻第1号 33-49

鹿内信善 2010 『看图作文指導要領-「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン-』 溪水社

鹿内信善 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち●看图作文レポートリー●』 ナカニシヤ出版

鹿内信善 2015 『改訂増補協同学習ツールのつくり方いかし方-看图アプローチで育てる学びの力-』 ナカニシヤ出版

白澤麻弓・斎藤佐和 2002 「日本語-手話同時通訳における

作業内容の分析』『特殊教育学研究』 40 (1) 25-39

田中瑞穂・鹿内信善 2014 「聴覚特別支援学校（聾学校）での早期教育における二言語環境整備」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第65巻第1号 413-423

Yoshinaga-Itano, Christine 2014 'Principles and Guidelines for Early Intervention After Confirmation That a Child Is Deaf or Hard of Hearing' *Journal of Deaf Studies and Deaf Education* 19 (2) 143-175

注1：本研究はJSPS 科研費16H00270のテーマに直接つながる

ものである。

注2：本研究では、学校名を、「聾」と漢字で表記し、それ以外は「ろう」と表記した。

謝 辞

ろう者講師として絵本読みを実施し、本論文中のトランスクリプト作成にご協力くださいました「NPO 法人北海道バイリンガルろう教育を推進する会」柏恵利氏に心より御礼申し上げます。